LIFE OF THE BUDDHA (FOR CHILDREN)

釈尊の生涯

（児童用）



LIFE OF THE BUDDHA

"FOR CHILDREN"

බුදු සිරිත සිතුවමින්

“ළමයින් සඳහා”

Ven. Weragoda Sarada Maha Thero
පූජ්‍ය වේරගොඩ සාරද මහා ස්ථවිර
Singapore Buddhist Meditation Centre
සිංගප්පූරු බෞද්ධ භාවනා මධ්‍යස්ථානය
342-D, Pasir Panjang Road, Singapore 0511
342-ඩී, පසීර් පන්ජං පාර, සිංගප්පූරුව 0511
Tel : (65)7783330 Fax : (65)7730150
දුරකථන :(65)7783330 ෆැක්ස් :(65)7730150

AUTHOR - PUBLISHER
කර්තෘ
Ven. Weragoda Sarada Maha Thero
පූජ්‍ය වේරගොඩ සාරද මහා ස්ථවිර

EDITOR
සංස්කරණය
Dammi Bay
ධම්මි බේ

ILLUSTRATOR
චිත්‍ර ශිල්පී
Vijaya Keerthi
විජය කීර්ති

COMPUTER GRAPHICS & DESKTOP PUBLISHING
පරිගණක මාධ්‍යරූප - විද්‍යුත් ප්‍රකාශනය
Psdma Kumari Dasanayaka
Sujatha M.L.Tan
පද්මා කුමාරි දසනායක
සුජාතා එම්. එල්. ටැන්

FIRST PUBLISHED
ප්‍රථම මුද්‍රණය
27 August 1995
27 අගෝස්තු 1995

Printed in Singapore
සිංගප්පූරුවේ මුද්‍රණය කෙරිණි

ブラマバカ

ブラマバカは生まれてブラマの世界で６回生まれ変わりました。　彼はブラマの世界で長い間住んでいましたので彼は出生と死亡についてのプロセスを忘れてしまった為、彼は永久に生きる事が出来るものと思いました。　彼は釈尊の前でもそのように自慢をしていました。 又、彼はゴータマ釈尊の前に他の釈尊達がいました。しかし彼等は全部死に絶えて彼等が何処に言ったかは解らないと言いました。　彼はそれでもその釈尊が彼の教えに従い、同じ神の光栄を楽しむよう提案しました。　その釈尊はブラマバカの誤りを指摘しブラマの世界の６つの前者の誕生の背景となるその理由を説明しました。　その釈尊の説教の最後に、ブラマバカは釈尊は正しいと告白して釈尊の社会的優越を認識しました。

そして彼はトリブジェムの中に逃避しました。

マリンバダ　マンガラ

千葉スリランカ仏教協会

〒274 千葉県船橋市松が丘1-4-1 ハッピーハイツ202号

電話番号: 0474-61-7202



Mr. and Mrs. Hiroshi Yada

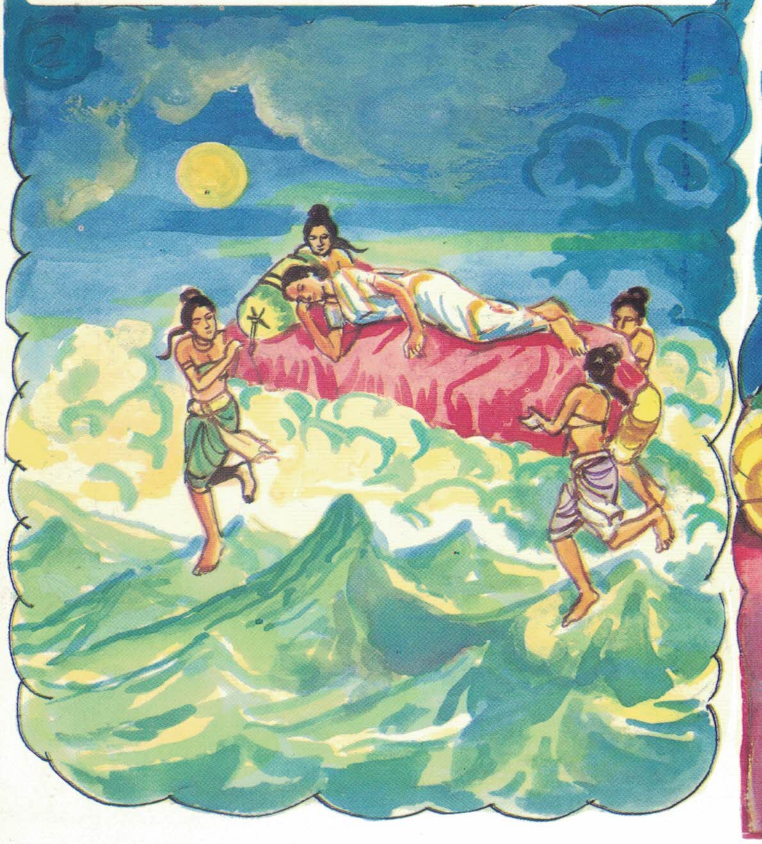
We record here our most cordial appreciation of the gesture of Mr. and Mrs. Hiroshi Yada whose gracious contribution has made it possible to publish one thousand copies of this book. Mr. and Mrs. Hiroshi Yada, have always very generously and with great devotion, promoted the cause of Buddhism worldwide. As pious and dedicated Buddhists, they have amassed a great store of merit by their activities towards the progress of Buddhism. Their present donation, is yet another step in their service to the Buddha, the Dhamma and the Sangha. The knowledge and the piety generated by this publication will continue to grow over many years to come.

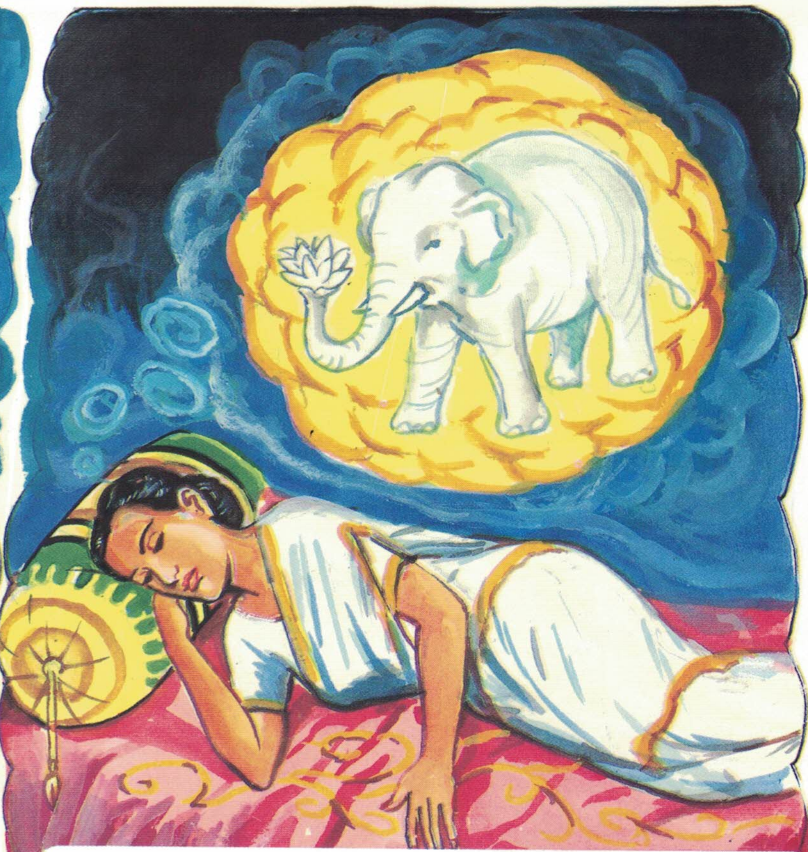
May the blessings of the Triple Gem
make them and all their people happy,
prosperous, healthy and long lived.

VEN. WERAGODA SARADA MAHA THERO


1　神の国トウシタに住んでいた私達の未来のゴダマ釈尊であるブーデイサッタは、他の神々（デーバ）達から、この世での母のお腹に受胎されるよう、要請を受けました。
2　その頃インドでは、エサラ（７月）祭を祝っていました。ブーデイサッタの未来の両親である、マハマヤ女王とスドダナ王もまたそのお祝いに参加していました。
3　7月の満月の日、女王はシラ（神の教え）を実行しました。その日の慈善行事で疲れ果てた夜、彼女は休息を取るため早めに床につきました。

4　明け方になって、女王は素敵な夢を見ました。それは、四人の女神、つまり四人の神の妻が、女王をヒマラヤ山脈に連れて行った夢でした。





5　そこで、女王は湖で沐浴をさせられ、黄金のベットに連れて行かれました。床に横になっていると、白い百合の花を鼻にのせた美しい白象が彼女に近づきました。そして、彼女の右側からお腹に入って来ました。

6　その瞬間、私達のブーデイサッタは天国を離れて女王の胎内に宿りました。それが女王の見た夢の意味したものだったのです。

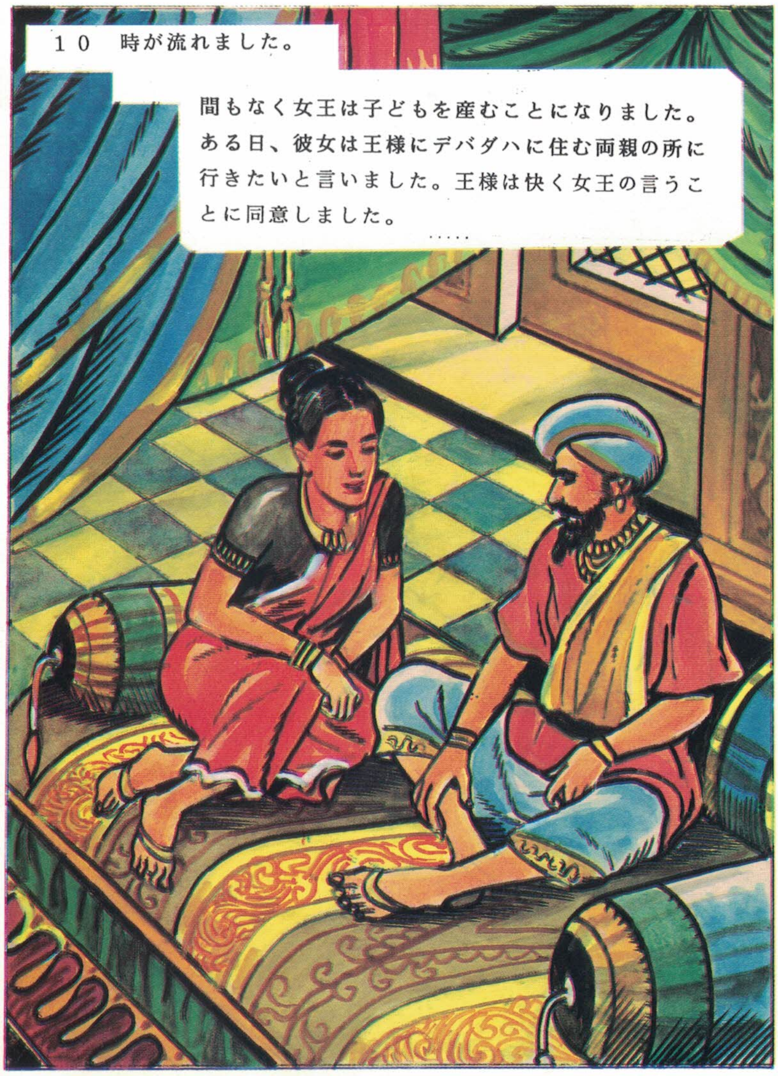




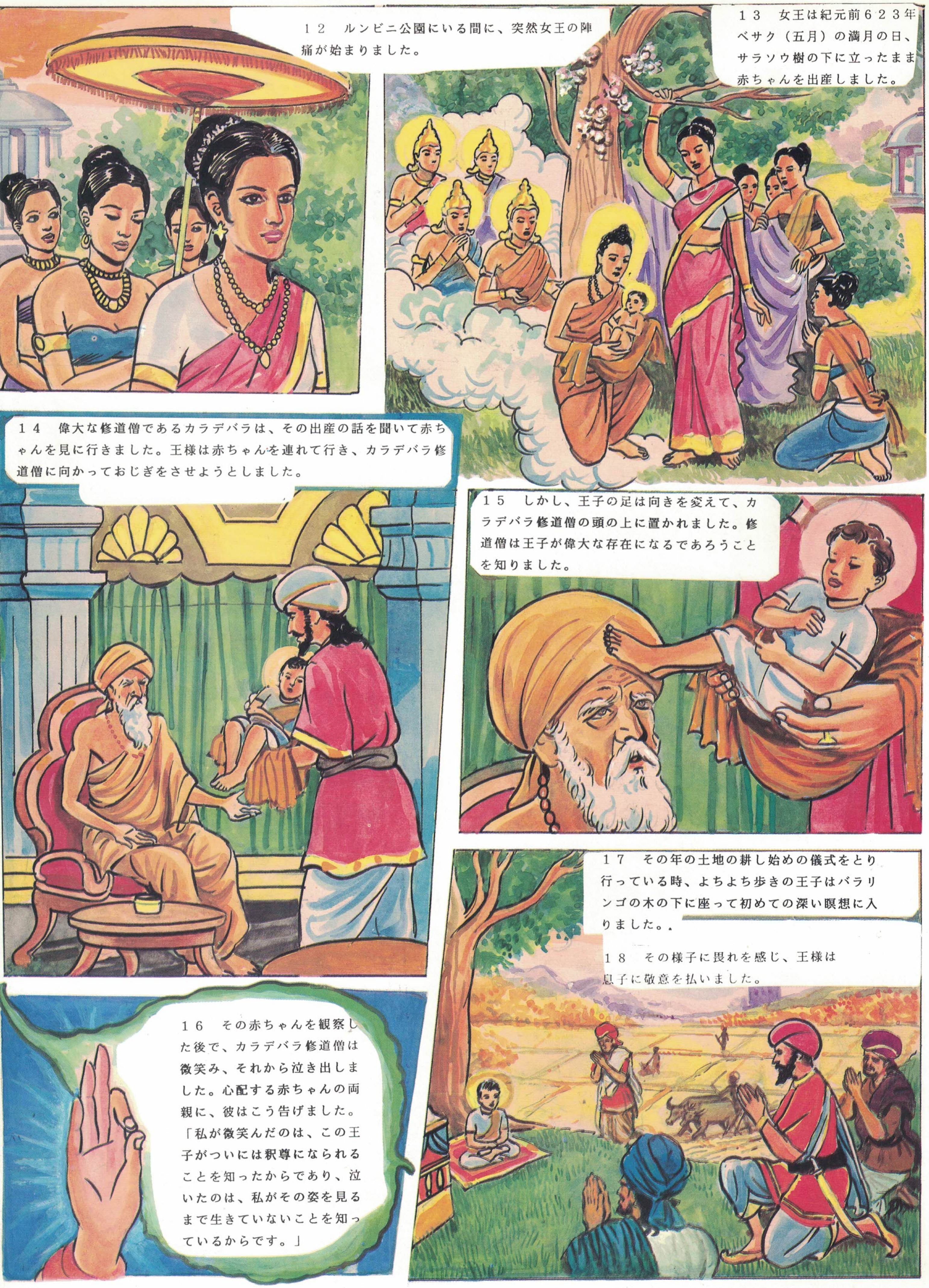
7　翌朝、マハマヤ女王はその夢について王様に話しました。王様はすぐに女王の夢を解き明かすため、最も知恵のある八人の家来を呼び出しました。


8　その八人の内七人は、「女王様は非常に高貴な男のお子様を宿されました。その方は将来、世界の君主あるいは完全に悟りを開かれた方になるでしょう。」と予言しました。


9　しかし、その八人の内で最も年若いコンダンニャだけは、「いいえ陛下、王子は必ず完全に悟りを開かれる方になるにちがいありません。と言いました。この家来は、後に釈尊の弟子となり、また、仏教徒の中で最初のアラハント（聖者）になりました。


１０　時が流れました。
間もなく女王は子どもを産むことになりました。ある日、彼女は王様にデバダハに住む両親の所に行きたいと言いました。王様は快く女王の言うことに同意しました。


１１　デバダハに行く途中、女王はルンビニ公園で、奇麗な花々に魅せられました。そしてしばらくの間、その景色を楽しむことにしました。



１２　ルンビニ公園にいる間に、突然女王の陣痛が始まりました。
１３　女王は紀元前６２３年ベサク（五月）の満月の日、サラソウ樹の下に立ったまま赤ちゃんを出産しました。
１４　偉大な修道僧であるカラデバラは、その出産の話を聞いて赤ちゃんを見に行きました。王様は赤ちゃんを連れて行き、カラデバラ修道僧に向かっておじぎをさせようとしました。
１５　しかし、王子の足は向きを変えて、カラデバラ修道僧の頭の上に置かれました。修道僧は王子が偉大な存在になるであろうことを知りました。
１６　その赤ちゃんを観察した後で、カラデバラ修道僧は微笑み、それから泣き出しました。心配する赤ちゃんの両親に、彼はこう告げました。「私が微笑んだのは、この王子がついには釈尊になられることを知ったからであり、泣いたのは、私がその姿を見るまで生きていないことを知っているからです。」
１７　その年の土地の耕し始めの儀式をとり行っている時、よちよち歩きの王子はバラリンゴの木の下に座って初めての深い瞑想に入りました。。
１８　その様子に畏れを感じ、王様は息子に敬意を払いました。


１９　王子は家庭教師のサバミッタにつきました。しかし、まもなく学識の面で彼の師に勝るようになりました。
２０　結婚する前に、王子は従兄弟たちと相応するということを証明するため、親戚に自分の武芸を披露しなければなりませんでした。
２１。彼の親戚は感動させられました。
２２　シッダッタ王子はいとこであるヤソダラ王女を妻としました。その時彼は１６歳でした。
２３　ある日馬に乗って外出した時、王子は心をひどく動揺させる四つの光景を見ました。それは非常に年老いた人、病人、人間の死体、苦行僧でした。彼は絶望感の中で考えました。「人生は苦しみに満ちている。私はこれらすべての苦しみから逃れる方法を見つけようとしなければならない。」
２４　ちょうどその時、王子は、「殿下、奥様がたった今男のお子様を御出産になりました。」と告げられました。
２５　それを聞いて、王子は、「えっ、ラフラ！それはもうひとつの束縛だ！」と考えました。そこでその男の子は彼の祖父からラフラと名づけられました。
２６　その夜遅く、王子は、「宮殿や家族から離れて、誰もが持つ苦しみを取り除く方法を探しに行かなければならない。」と心に決めました。


２７　王子は、新しく生まれてきた息子を素早く見て考えました。「もし私が息子に会おうとすれば、ヤソダラは目を覚まして私が出て行くのを止めるだろう。まず苦しみを取り除く方法を見つけてから、息子に会いに戻ってこよう。」
２８　「チャンナ、私は旅に出るので私の馬を連れて来なさい。」と言って馬車の御者を呼びました。
２９　邪悪な神、マラは王子を止めようとしました。「王子よ、行くのはやめなさい。七日間のうちにあなたは全世界の君主になるだろう。」
３０　「マラ、君は私を止めることはできない！私は旅に出る。私は苦しみから逃れる方法を見つけださなければならないのだ！」
３１　夜じゅう馬を走らせながら、王子は、「チャンナ、今夜は満月だ。」と言いました。
３２　「はい、殿下。辺り一面が月の光でかがやいています。非常にきれいです。これは縁起の良いしるしにちがいありません。」
３３　主人から離れるのをいやがって、チャンナは、「私も出家させていただきたい。」と嘆願しました。
３４　「それは後回しだ。今すぐ宮殿に帰って、私の父と妻に私の出家のことを知らせなさい。」



３５　アノマ川の岸辺で、シッダッタ王子は頭髪を切って行者の服に着替えました。その時彼はまだ２９歳でした。
３６　この世の苦しみから逃れる方法をみつける上で、ゴータマ行者は教えを受けるため非常に尊敬されていた二人の宗教上の教師に近づきました。そして非常な早さで彼はその教師たちが教えねばならなかったことをすべて学びました。
３７　ある日彼は、「他の人について行ったのでは答えを見つけることはできない。自分自身で見つけなければならない。」と考えました。
３８　そこで、ブーディサッタは彼の教師から離れて行きました。そしてネランジャラ川に来ました。「ここは瞑想するのに良いところだ。川に近いし村にも近い。」
３９　ゴーダマ行者は彼の問題を解決する方法を見つけようと非常に努力しました。そして考えました。「私ばこの身体を苦しめなければならない。それが苦しみから逃れる方法かもしれない。」
４０　６年間もの長い間、彼は自分の身体をひどく苦しめ、気を失うまで断食しました。身体は骨と皮だけになり死の一歩手前にさえなりました。
４１　その時、彼は苦痛に満ちた修行は自分を真理に少しも近づかせてはいないと判断しました。そこで彼は再び食べ物を口にすることにしました。


４２　ある朝早く、ブーデイサッタは男の子を出産したばかりのスジャタから思いがけなくミルクライスの朝食を捧げられました。彼女は、「私の願いがかなって男の子を出産できたように、あなたも求めておられることが達成されますようにお祈りいたします。」と言いました。
４３　この食事の後、彼は近くの川に行きました。そして、もし悟りを開くことができるならば上流に流れて行くようにと願をかけながら、スジャタから施された鉢を川の中に投げこみました。するとその通りになりました。
４４　その晩、彼は菩提樹の下に座って瞑想にふけりました。
４５　間もなく、邪悪な神であるマラが弟子の従者を連れてブーデイサッタに挑戦しました。しかし、マラは彼が悟りを開くのに成功することを止めることはできませんでした。
４６　釈尊はベサクの満月の日に悟りを開くことに成功しました。その時彼は３５歳でした。それからの七週間をブッダガヤで瞑想し、問題から解放された無上の喜びを味わって過ごしました。
４７　それから彼はブッダガヤを離れて、初めて五人の行者に説教したベナリスにあるデイア公園に行きました。
４８　その五人の行者は初めのうちは釈尊に従いましたが、その後誤解がもとで彼から離れてしまいました。彼らは釈尊の最初の門弟であり、ゴータマ釈尊時代の最初のアラハント（聖人）でした。その説教は四つの気高い真理と八の倍数からなる教えの道でした。

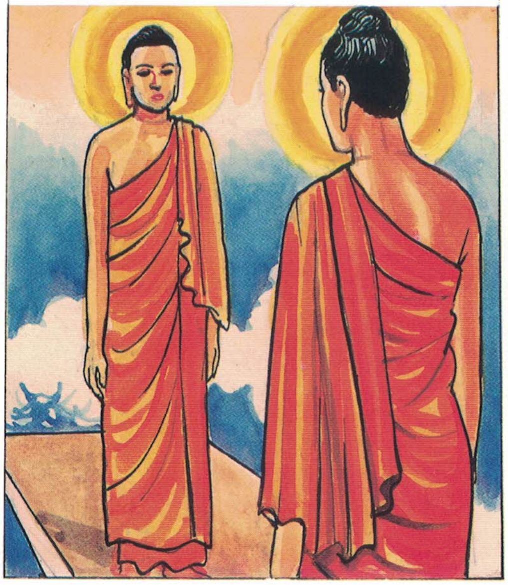
４９　悟りを開いた後の最初の週：釈尊は深い瞑想で過ごし、すべての苦しみから解脱した涅槃の無上の喜びを味わいました。その後、生命の無限の再生をもたらす状態について瞑想しました。



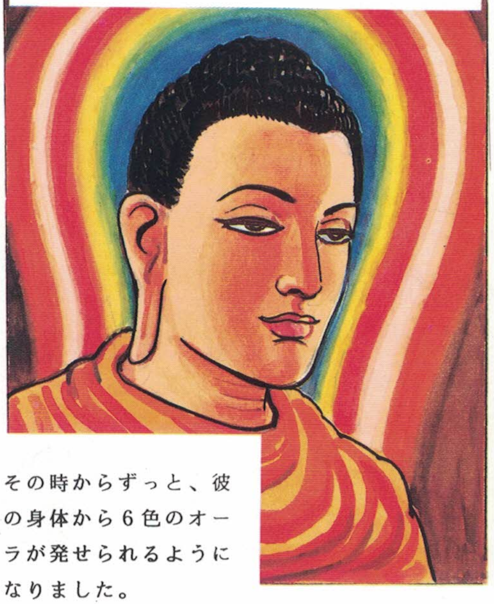
５０　第二週目：釈尊は世界に感謝の念を教えました。—彼を保護した菩提樹の木に感謝を示すため、一週間の間、まばたきせずその木をみつめたまま立ち続けました。



５１　第三週目：釈尊は歩きながら瞑想し、仏教の教義について考えました。

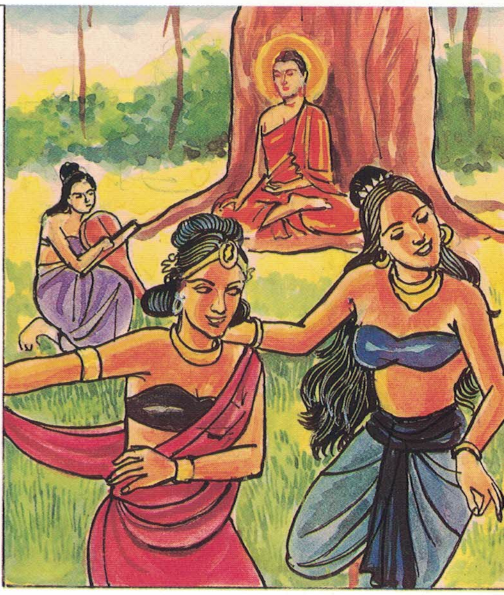


５２　第四週目：彼はラタナガラ（特別な部屋）で深く瞑想して過ごしました。



その時からずっと、彼の身体から６色のオーラが発せられるようになりました。

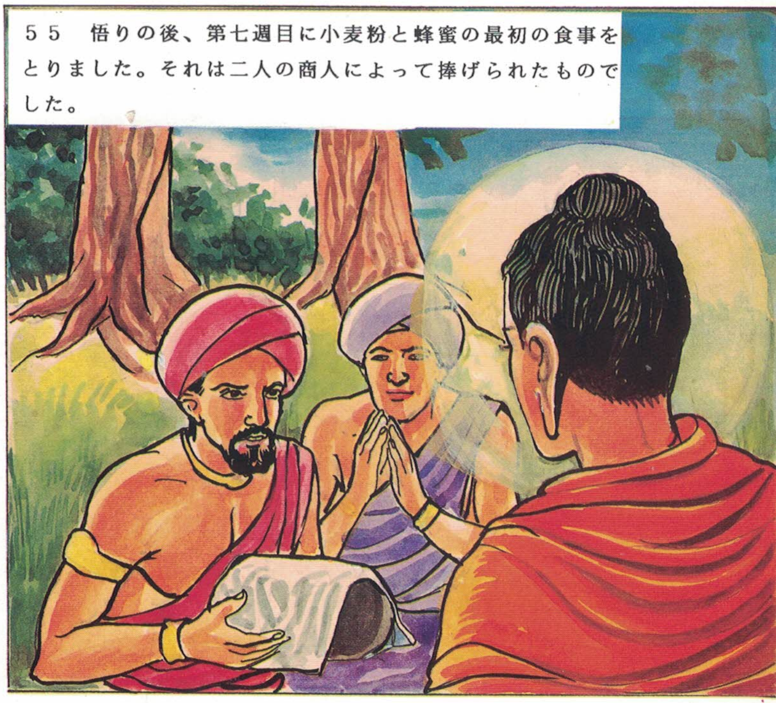
５３　第五週目：マラの娘が彼を誘惑しようとした時、彼はアジャパラの木の下で瞑想していました。



５４　第六週目：突然暴風雨が起こり、ひどく寒くなりました。ナガという蛇が現れ、その頭部で嵐から釈尊を守りました。



５５　悟りの後、第七週目に小麦粉と蜂蜜の最初の食事をとりました。それは二人の商人によって捧げられたものでした。

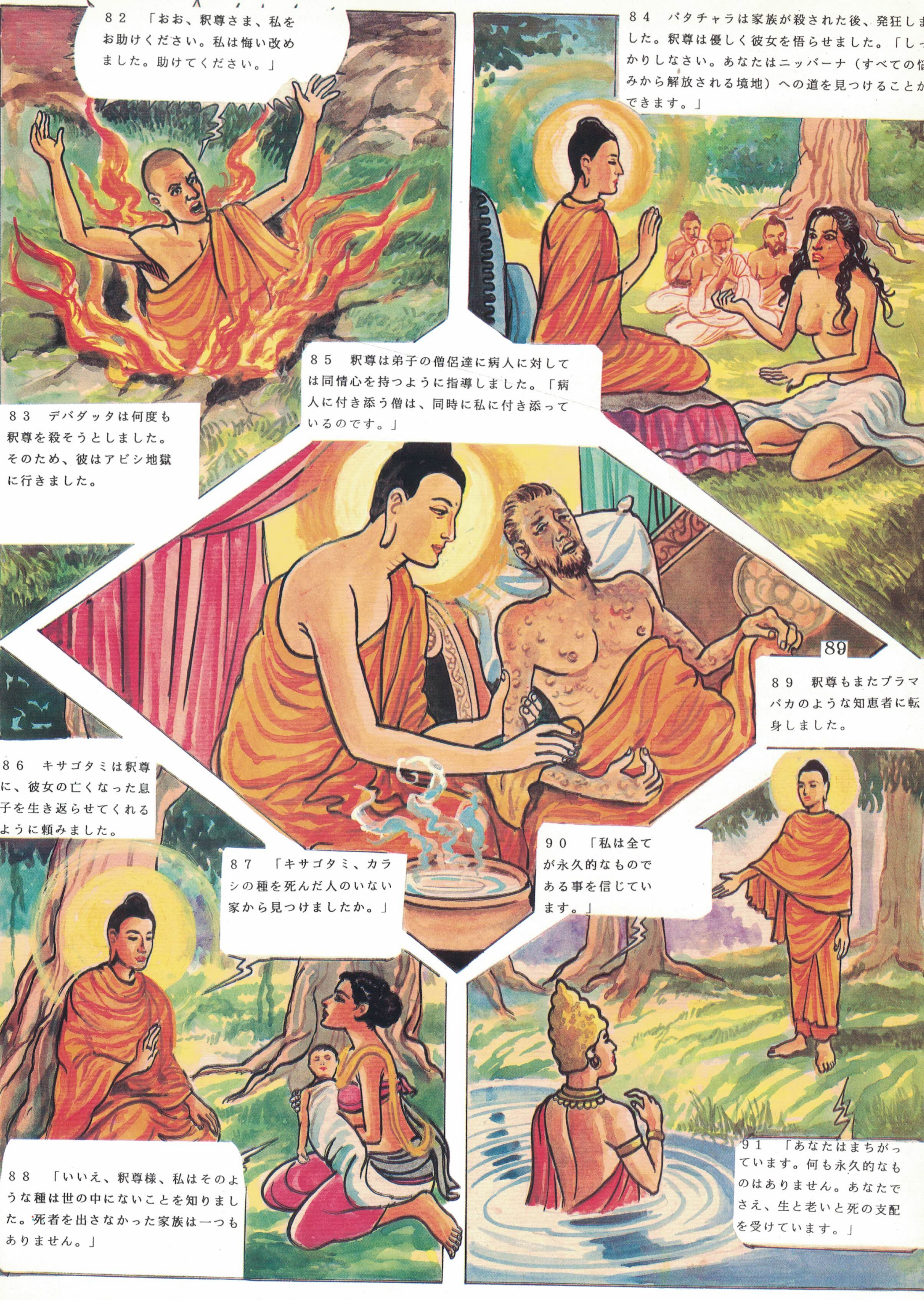



56　スリランカの歴史によると、釈尊は三度スリランカに行きました。一度目はマヒヤンガナのヤッカス（鬼神）の間での紛争を解決するためでした。それによりシンハリ族がスリランカに落ち着く道が切り開かれたのです。
57　釈尊が争いを止めたもう一つの出来事は、釈尊の親戚であるサキャストとコリヤスがロヒニ川をめぐって争っていた事でした。
58　ビンビサーラ王は、釈尊の最初の王室の保護者でした。王は釈尊にウェルワナ（竹林精舎）僧院を贈りました。
59　家を離れてから七年目、釈尊はカピラパトウに帰ってきました。そして父親に会いに行きました。
60　ヤソダラは釈尊を指さしながら、「ラフラ、あの方があなたのお父様です。行ってあなたをお父様の後継ぎにしていただけるよう頼みなさい。」と言いました。
61　ラフラは父の前でかしこまりながら、「親愛なるお父様、あなたの影でさえ私の喜びです。私を後継ぎにしていただけませんでしょうか。」と言いました。
62　「ラフラ、私と一緒に来なさい。」と釈尊は言いました。そして7歳の息子を出家させました。

６３　釈尊は慈愛と供に知恵で満ちあふれていました。彼は悟りを開いた後の４５年間の布教中に、多くの人を苦しみから救い、仏教の教えを人々に伝えました。ここにいくつかの物語があります。＊印のついている絵については、物語全体を裏面のページに収録してあります。



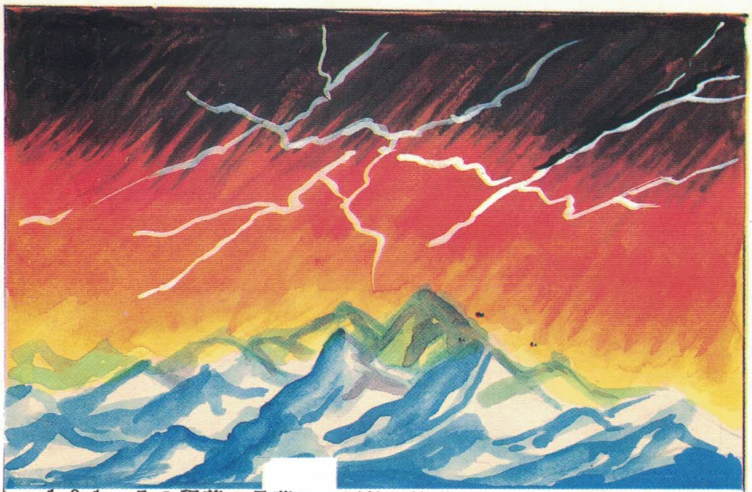

７０　釈尊は辛抱強くアラワカの質問に答える事により、残酷な人食い鬼の彼を服従させました。
７１　「おまえに質問しよう。もし答えられなければ、わしはおまえをひどい目にあわせてやる。」
７２　釈尊はある織物職人の娘がちょうどその日に死ぬことを予知し、いろいろと難しい質問をしながら彼女がソタパティ（聖人の第一段階）になるように助けてあげました。
７３　「あなたはどこから来たのですか。これからどこに行くのですか。」
７４　「私は知りません。私は知りません。」
７５　裕福な女性の後援者であるビサカは、有名なプバラマ僧院の寄贈者でした。
７６　「どうぞ、高貴な方。この僧院を受け取ってください。」
７７　自分を恨む教師を満足させるため、アングリマラは釈尊に止められるまで、千人近い人を殺しました。彼は後にアラハッタ（最高位の聖人）になりました。
７８　「もうたくさんだ、アングリマラ。人を殺すのをやめて、りっぱな生活をしなければならない。」
７９　「はい、高貴な方。どうか私を弟子にしてください。」
８０　釈尊は非常に同情的であり、愛のある優しさに満ちていたので、酔ったゾウのナラギリでさえ手なづけることができました。
８１　ナラギリは、かつての釈尊の弟子で、今は敵となったデバダッタによって放されましたが、これはデバダッタ自身に害を与えることになりました。



８２　「おお、釈尊さま、私をお助けください。私は悔い改めました。助けてください。」
８３　デバダッタは何度も釈尊を殺そうとしました。そのため、彼はアビシ地獄に行きました。
８４　パタチャラは家族が殺された後、発狂しました。釈尊は優しく彼女を悟らせました。「しっかりしなさい。あなたはニッバーナ（すべての悩みから解放される境地）への道を見つけることができます。」
８５　釈尊は弟子の僧侶達に病人に対して同情心を持つように指導しました。「病人に付き添う僧は、同時に私に付き添っているのです。」
８６　キサゴタミは釈尊に、彼女の亡くなった息子を生き返らせてくれるように頼みました。
８７　「キサゴタミ、カラシの種を死んだ人のいない家から見つけましたか。」
８８　「いいえ、釈尊様、私はそのような種は世の中にないことを知りました。死者を出さなかった家族は一つもありません。」
89
８９　釈尊もまたプラマバカのような知恵者に転身しました。
９０　「私は全てが永久的なものである事を信じています。」
９１　「あなたはまちがっています。何も永久的なものはありません。あなたでさえ、生と老いと死の支配を受けています。」



９２　釈尊は金持ちでも貧乏人でも同じようにもてなしました。彼に贈り物をした人達の中にはアンバパリという遊女がいて、彼女はマンゴの栽培場を贈りました。
14
９３　「どうか、私のささやかな贈り物をお受け取りください。」とアンバパリは言いました。
９４　釈尊がそれほど徳の高い人なので、人間と神の両方が彼に奉仕すべく競い合いました。かつて釈尊が病気になった時、天の神の王様サッカ自身がみずから看護のためにやって来ました。
９５　「それは私の義務であり、あなたに奉仕することは私の名誉なのです、高貴な方。」
９６　釈尊の弟子達の最初のリーダーのサリプッタは、釈尊の死の六ヶ月前にこの世を去りました。
９７　その直後、弟子達の副師僧のモガラナが嫉妬深い敵達によって送られて来た暗殺者によってメチャメチャに切られてしまいました。
９８　その昔、前世でモガラナは自分の年老いた両親をたたいて殺してしまいました。その罪のため、彼はアビシ地獄で長期間苦痛を味わいました。この世では彼はアラハンでありましたが、親を殺した罪から逃げることができず、残酷な死にさらされなければなりませんでした。
９９　ある日、マラは釈尊に近づき、「あなたの死の時がきました。」と言いました。
１００　「おおマラ、喜びなさい。三ヶ月のうちに私は死ぬだろう。」

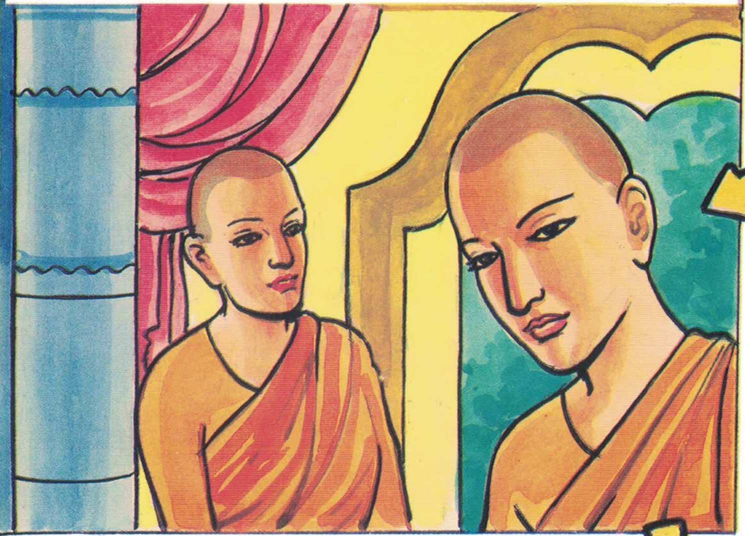


１０１　その釈尊の言葉に、天地が抗議をしました。天は裂け、雨は降り注ぎ、雷は落ち、雷鳴は鳴り響きました。

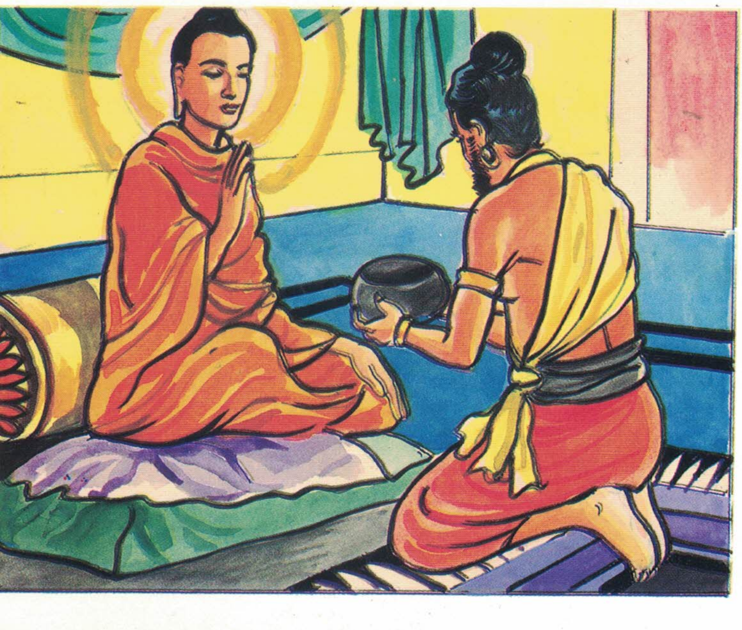
１０２　釈尊は地球上に真実にそうであり、苦しみから逃れる真理を教えるために現れました。彼の４５年に及ぶ長く成功した布教の間、ゴータマ釈尊は、布教の使命を果たし、自分の仕事は終わったと感じました。彼は自分の寿命を延ばさないことにしました。



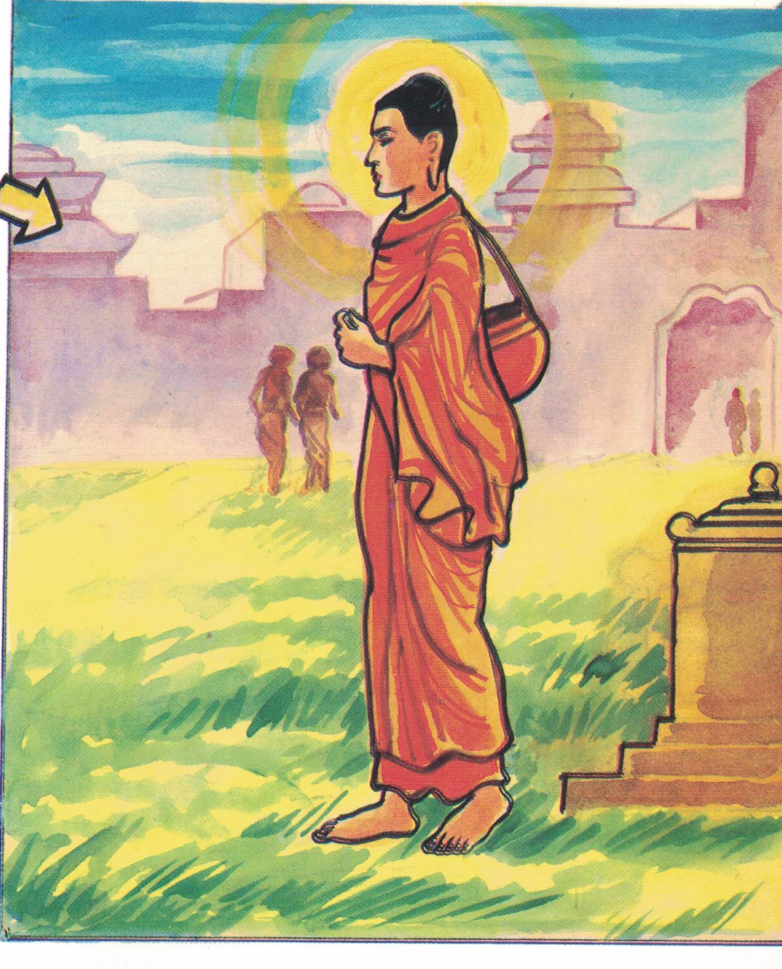
１０３　釈尊に最も近い血族のある者は彼より前に亡くなってまいした。その中には彼の門下の二人の高僧、妻のヤソダラ、養母のパジャパテイゴタミ、そして息子のラフラがいました。



１０４　釈尊はパバで最後の食事をとりました。その食事は鍛冶屋のチュンダによって提供されたものでした。釈尊だけがその食事を口にしました。彼はチュンダに自分が食べ残したものを土に埋めるよう言いました。するとすぐに釈尊は気分がひどく悪くなり激しい痛みを感じました。



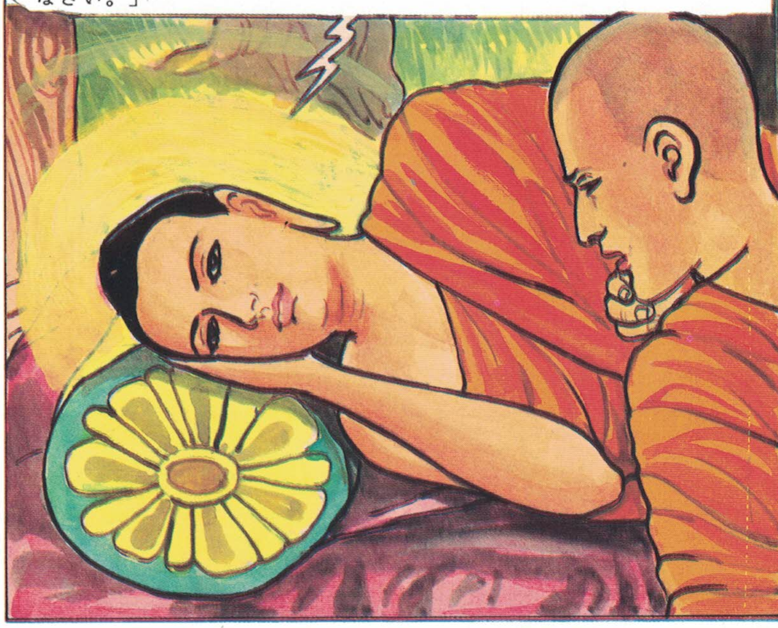
１０５　その時でさえ、釈尊はそこで死を迎えることを決心した小さな村クシナラに旅をして終えるということを主張しました。そのことを心にとめて彼はパバ村からクシナラに向かって最後の6マイルの道を歩き通しましたが、痛みのために5回も休息をとりました。

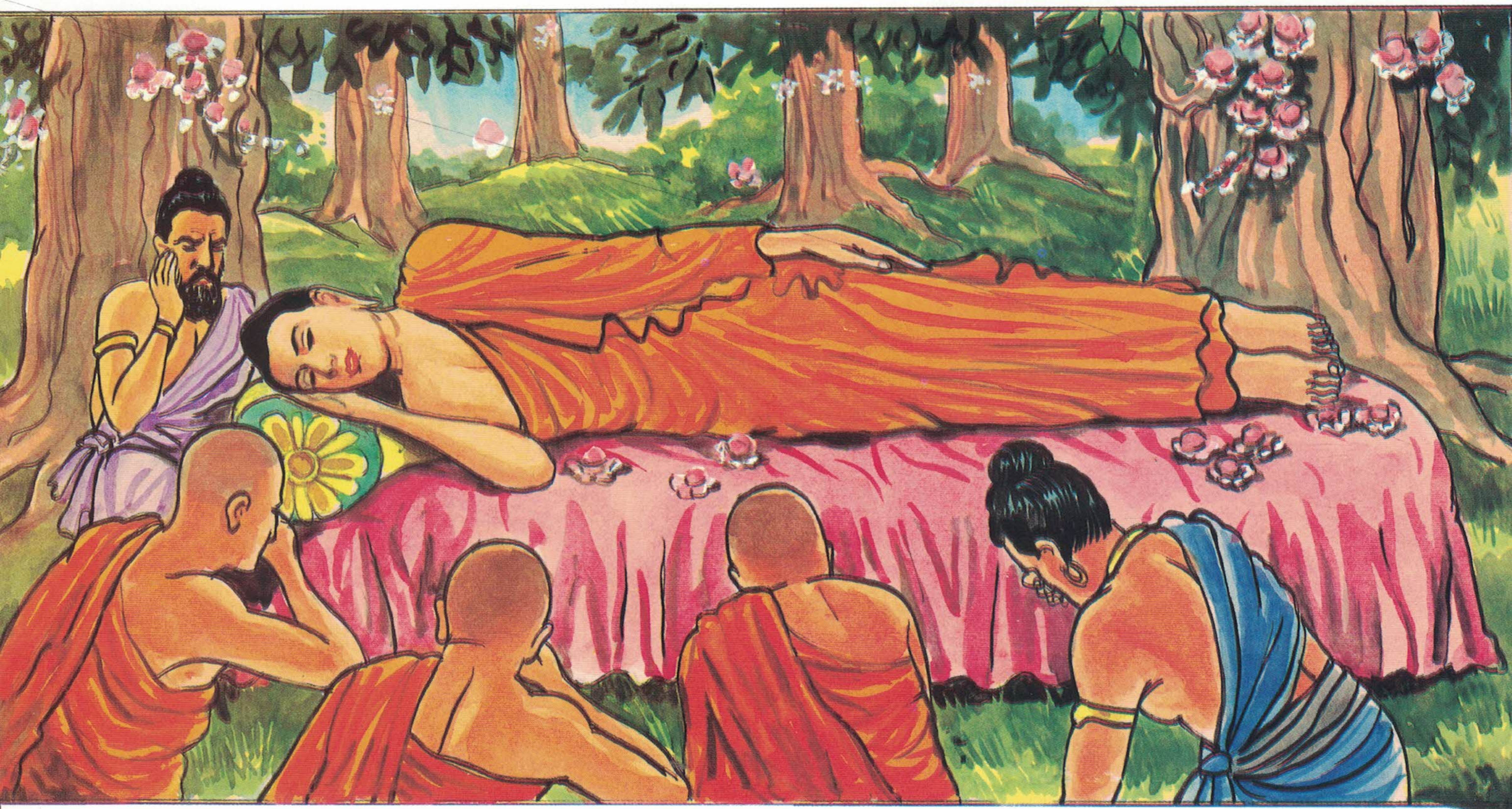


１０６　クシナラへの道に沿って、デバス（天神）とその他の天帝は、彼らの最後の敬意を払うためやって来ました。彼らはまた花を振り撒き音楽を演奏しました。

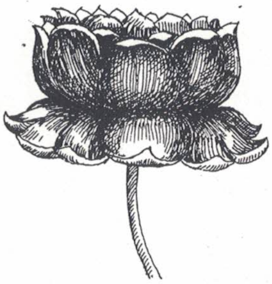


１０７　釈尊の２５年に及ぶ個人的な随行者であるアナンダはひどく泣きました。釈尊は彼を慰めて励まし、「アナンダ、十分だ。悲観したり泣いたりしてはいけません。私達にとって愛しく楽しいもの全てから離れなければならないと私は君に言わなかっただろうか。君は多くの功績を残した。君の功績に傷をつけるようなことはやめなさい。」





１０８　ゴーダマ釈尊の永眠の場所はクシナラの外側にある公園の二本のサラの木の間に置かれた寝椅子でした。注意深く、彼は右側を下にして横になりました。それから彼は集まった僧侶達に告げました。「もしあなた方のだれかが釈尊やダンマ（その教え）やサンガ（僧侶達の社会）あるいは宗教的な儀式の方法について疑問を持っているのなら、私に質問しなさい。私がまだここにいるうちにあなた方の疑問をはっきりさせないでいて後で後悔しないようにしなさい。」三度釈尊はこれを繰り返しました。そして黙りました。釈尊は続けました。「あらゆるものは無常なのです。怠けることなく修行に励みなさい。」この最後の言葉を言い終わると、釈尊は深い瞑想に入り、間もなくこの世を去りました。それは紀元前５４３年５月の満月の日でした。その日はちょうど釈尊の８０歳の誕生日でもありました。



ソパカ

ソパカはラジャガハ村の社会的に低い階層の両親の元で生まれました。 彼の父は彼が未だ赤ちゃんの頃に亡くなり、彼の母親は再婚しました。 ソパカの継父は彼を非常に嫌いました。 或る日、彼はソパカが彼自身の息子と喧嘩した為、ソパカに向かって激怒しました。 ソパカを罰する為、彼はソパカを共同墓地に連れて行き、ソパカを死体に縛りつけてその場に置いてきました。

ソパカは辺りが暗くなるにつれて次第に怖くなって来ました。 彼は、かなきり声を上げて助けを求め、恐ろしさの中で哀れにも泣きじゃくりました。 すると突然、一つの明るい光線が彼の目の中に入って来ました。 それと同時に彼を慰めるように、”ソパカ、君を助けて上げるから心配するではない”と優しい声が聞こえて来ました。

それが釈尊でした。 釈尊はソパカが苦しんでいる所を見て彼を助けに行きました。釈尊の心霊的なパワーにより、彼はソパカをロープから解放する事ができました。 そこで、釈尊はソパカを彼がいたジェタワナ僧院に連れて行く為、前に向かって光線を発しました。 ジェタワナに到着次第、ソパカは彼に説教したその釈尊の足元に身を投げました。その説教が終わった後、ソパカはソタパテイの報いのパワーが感じ取りました。

とかくする内に、ソパカの母親が彼女のいなくなった息子を大慌てで探していました。絶望感の中で、彼女は釈尊の力を借りる為、ジェタワナ僧院に行きました。 そこで、釈尊は彼女に救助の道を探さずに子供とその他の血族の男の子を探す目的はどこにもない旨説教しました。 その説教が終わる頃、彼女も、又ソタパテイの報いるパワーを感じ取りました。 一方、ソパカの方は、その説教によりアラハッタ（仏教の道の最高位）を取得しました。 その時、彼は未だたっ７歳でした。

ナンダ王子

ナンダ王子は釈尊の異父兄弟で、その釈尊の養母であるパジャパテイゴタミの息子でした。　ナンダ王子が彼の聖職受任、新宅開き、そして結婚を祝う事になっていました。その釈尊は施物の為、彼の家に入りました。　彼は彼のボールをナンダ王子に与えて彼が幸福になるように願い、席を立ち彼のボールを持たずに離れて行きました。　釈尊に対する尊敬の念からナンダ王子は敢えてその釈尊が彼のボールを持って帰るように頼みませんでした。　従って、彼はその家から出て釈尊に付いて行くしか方法はありませんでした。　彼はその釈尊が振り向いてボールを取りに来るものと期待していました。　しかし、彼の期待は、その釈尊が心に止めて歩き続けました事から打ち砕かれました。　彼は、彼女のバルコニーから彼のフィアンセが、私の師僧様、早く帰って来て下さい”と言って彼を呼び出すのを聞いた時、心を痛めました。

その僧院に到着後、その釈尊はナンダ王子に、彼がその宗教的儀式に入りたいか否か尋ねました。　その釈尊に深く敬い、ナンダ王子は、ノーと言う事が出来ず従って彼は任命される事に同意しました。　しかし、彼は非常に不快に思い、彼は彼のフィアンセの事を考え続けました。　その釈尊は、ナンダ王子の気持ちを読み、彼を正しい道に向ける計画を考えました。　彼はナンダ王子の所に、王子に天人の聖霊を見せる為、天国の地位につかせました。　上に上る途中、ナンダ王子は焦土化した原野に焼き果てた切り株にまといついている焼き焦げたメスの猿を見せられました。　ナンダ王子がその天国の地位に着いた時、彼は、彼らが前に見た年老いたメスの猿と彼のフィアンセと比較し、天人の聖霊によって非常に印象ずけられました。

釈尊は若し彼が教えられた通りに彼の訓練を耐えられならば、天人の聖霊が得られる事を約束しました。　ナンダ王子は、その事に熱意を持って同意しました。しかし、これは彼をあざけ笑ったその他のビクフスの耳に入りました。　ナンダ王子は彼の卑劣な動機を恥ずかしがる一方熱心に努力し、結果的にはアラハッタ（最高位の高僧）の座を得ました。

アラワカ

アラワカは山林の中の洞穴に住んでいて人を食べて生きていた鬼神でした。　或る朝、釈尊は、若しアラワカが試練を生き抜いて来たとしたらアラワカの所に食物として送られる事になっていた若い王子が食べられてアナガミになるであろうと予知し、彼を救う事を決めました。 そして釈尊は彼を中止させる為、アラワカのいる洞穴に行きました。　アラワカはそこにはいませんでした。　釈尊はアラワカの門番であるガドラバに洞穴の中で一夜過ごせるようお願いしました。　ガドラバは、アラワカは何時も鬼神の会合に出席する為、雪の積もっている所に行っていて、又、アラワカは極度に獰猛であり、彼の両親でも尊敬しなかった人なので釈尊は一夜洞穴で過ごす事は考えるべきでないと言いました。

釈尊は彼は繰り返して要求しました所、ガドラバは釈尊に向かって、彼は彼の師僧に知らせてその雪の積もった所に急行しなければならないと言いました。　釈尊はその住居に入って、アラワカの椅子に座りました。　その洞穴の中にいた女性達が釈尊に挨拶をして釈尊の言う事を聞く為、回りに集まって来ました。

アラワカが、アラワカのその洞穴に釈尊が到着したと言う事をガドラバから聞かされた時、彼は激怒し急いで家に向かいました。　途中アラワカは、アラワカの洞穴の所に釈尊が来たその幸運を祝った二人の鬼神に出会いました。（その二人の鬼神はミーテイングの途中、釈尊をアラワカの場所で見てその釈尊に挨拶しました。）　それがアラワカを一層激怒させました。

帰宅すると直ぐに、アラワカはその釈尊にその洞穴から出て行くように言いました。釈尊は静かにその言葉に従いました。　アラワカはアラワカ自身のパワーに喜びを感じ釈尊に又来るように指示する事に決定しました。　釈尊はその言葉に再度従いました。　アラワカは３回このようにし、３回釈尊はそれに従いました。　四回目には釈尊は、”私の友よ、もう充分、私は出て行きません。　貴方の好きなようにして下さい。”と言いました。

アラワカは、”貴方に一つ質問をします。　若し、貴方がその質問に答えられるならば私は貴方の気持ちを歪めるか、貴方の心を裂くか、或いは私は貴方の足で連れて行って川の向こうに投げます。”と言いました。

釈尊は、”私の友よ、私の気持ちを歪めたり、私の心を裂いたり、私の足を捕まえて行って川の向こうに投げる事ができるような人はこの世界には一人もいません。”と答えました。

アラワカは、彼の四つの事で質問しました。 彼の両親は釈尊であるカッサパからその質問と回答の両方を知り、彼にそれらを教えましたが、アラワカはその回答を忘れてしまいました。 しかし、彼は金箔でそれらを書きその質問を保存し良好な状態で持ち続けました。 その数多くの最初の質問は以下の通りでした。

”人類にとって最も大きな富とは何であろうか。 熟達した場合、何が最大の至福をもたらすか。 全ての味覚の中で最も良いものとは何か。 最良の生活とは何か。

釈尊は、”人間にとって最も大きな富とは忠誠です。 その正しい教義をマスターしたときには最大の至福をもたらします。 本当の事以上に良い事はありません。 賢い暮らし方は人生の最善の方法です。” と回答しました。

アラワカは、次に、釈尊に対して、”どう言う具合にして人々はその洪水を横切って渡りますか。 如何にして人々は海を渡りますか。 どう言う風にして悲しみに耐えますか。人々は如何にして浄化されますか。”と質問しました。

釈尊は、”人々は洪水を自信もって渡ります。 人々は海を注意して渡ります。 人々は努力して悲しみに打ち勝ちます。 人々は賢明さにより浄化されます。”と答えました。

アラワカは最後に、”賢明さはどうして得られますか。 豊かさはどうしたら見つかりますか。 名声はどうしたら得られますか。 どうしたら友達と親密になれますか。 この世界から次に行く際、どうしたら悲しまずに行けますか。”について質問しました。

釈尊は、”注意深く理解力のある人がニッバーナに導かれる純粋な人々の釈迦の教えを聞く事により賢明さが得られます。 正確に且つ熱心に物事をする人が豊かさを獲得します。 真実により名声を獲得します。 寛大さが友人との親密さをもたらします。 忠誠心を持ち四つの美徳、つまり正直さ、品行の良さ、勇気と寛大さを持っている者は死亡後悲しまない。

釈尊が全ての質問に答えた時、彼はアラワカに、若し彼が満足しない何かがあったりした場合には彼は他の僧侶の師僧に頼んで自由に入れるようにする事ですと彼に言いました。

アラワカは彼がその回答に全面的に満足し、誰にも頼む必要がないと喜んで感謝し語調を強めて言いました。 それから彼はトリプルジェム（三つの宝玉）の中に逃げ込み釈尊の生命の長い帰依者となりました。

織屋の娘

その織屋の娘は、彼女が人生の無常と死の不可避について釈尊から説教を聞かされたのは１６歳の時でした。　その少女は、その場で人間はいつでも死神について瞑想をしなければならないと言う釈尊の忠告を受ける事を決意しました。　次の３年間、彼女は昼夜念入りに死神にかかわる瞑想を実行しました。

或る日、その釈尊は、彼の神性なる目で世界を調査している内に、その少女の心は彼の教えを理解しようとしている事を知りました。　そこで、彼は彼女を見つける為、出発しました。　彼女が、その釈尊が町に来る事を聞いた時、彼女の心は喜びで満ちあふれ、早速、彼女はその釈尊に敬意を払いに行きたくなりました。　しかし、その時、彼女の父が彼女に父の使い走りをするよう言われました。　しぶしぶ彼女は父の言う通り父の使い走りに同意しましたが、彼女はその使い走りは時間が相当にかかり釈尊の説教には間にあわなくなる事を知りました。

一方、釈尊は昼食を終えて、彼の説教をする準備を整える為、正座しました。　しかし彼は、その少女がその会衆の中にいない事が解り、彼は、”或る少女の為にここにやって来ました。　しかし今の所まだその少女がここに来ておりません。　その少女が来ましたら説教を始めます。”と言いました。　そこで一斉にその会衆はその少女が来るのを待ちました。

終に、その少女は彼女の仕事を終えて父親の仕事場に出掛けました。　その途中で彼女はその会衆を通り過ぎて行き釈尊の方を見つめて立っていました。彼も又彼の頭を上げて彼女の方を見つめました。　彼女を見るその釈尊の態度で彼女は釈尊が彼女に話したくて彼は此の町に来たその最たる理由は彼女にあった事を知りました。　その時点で釈尊は彼女の死はその日に起こりそうだと感じ、又若し、彼が彼女に説教しなかったとしたら、彼女は死んでしまい彼女の未来の出生は不常のものとなるであろう事を知りました。　しかし、若し、彼女が彼の説教を聞いたとしたら、彼女は報いられて、ツシタ天国で再び精神が生まれ変わるでしょう。

その少女はその釈尊に近ずき、そして釈尊とその少女は言葉を次の様に交わしました。”少女あなたはどこから来ましたか”と尋ねました。　”釈尊様、私は知りません。”　”貴方は何処に行くのですか。”　　”釈尊様、知りません。”　　”あなた解らないのですか。”　　”釈尊様、解ります。”　　”解っているのですか。”　　”釈尊様、私は解りません。”

その会衆は少女がその釈尊に向かって適切に答えなかった為、いやな感情を受けました。会衆は、その少女は、彼女がどこから来たのかと聞かれたら、少女は織屋の家から来たと答えるべきであり、又、何処にいくのですかと聞かれたら、少女は織屋の家に行きますと答えるべきである感じ取りました。

釈尊はその少女に少女の回答を説明するよう尋ねました。　そこで、少女は、”釈尊様、貴方は私が私の父の家から来た事を知っていたでしょう。ですから私にあなたはどこからきましたかと質問する事は此の生活に入って生まれて来る前私がどこにいたかと言う意味する事になりますので私は貴方の質問に対して私は知りませんと答えたのです。　又貴方が私にあなたはどこに行くのですかと言った質問をした場合、その意味は私が死亡した後、どこで再び生まれ変わって来るのかと言う意味ですので私は知りませんとお答えしました。従いまして、その二つのご質問に対しましては私は返事のしようが御座いません。”と言いました。

釈尊は彼女のその答えは正確であると褒めました。　そして彼は、”何時私が、”あなたは知らない”と尋ねた時、あなたはどうして、”私は知っている”と答え、私があなたに、”あなたは解っている”と言うとあなたは、”私は解らない”と答えました。”と言いました。

その少女は、”師僧様、私は、”私は解ります”と答えました。　その理由は私は必ず死ぬと言う事が解っているからです。　しかし私は、”解りません”と答えました。なぜなら、それが何時になるか解らないからです。”と言いました。　その釈尊は彼女のその二つの回答が正確であると再度褒め、そして会衆に対して彼女の回答を誤解しないように諭しました。　そして釈尊は詩を下記の様に発表しました。

”盲目は此の世界である。幾人かはそれをその世界で見ている。
何人かは丁度鳥が巣から逃げて行くように天国に去って行く。”

それにより少女はそのフルーツの中で落ち着きました。　その日の後にその少女は父の織機の先端によって刺されてしましまい、釈尊が予言していた通り負った傷で死亡しました。　そして、彼女はツシタの天国で再び生まれ変わりました。

アングリマラ

アングリマラはコサラの王様のチーフリーダーの息子でした。 彼の元の名前はアヒンサカと言って罪のない人物でした。 彼は成年になった時、彼は勉学の為、タックシラ大学に送られました。 アヒンサカは非常に良くやった事から彼の同級生は妬みに取り付かれました。 彼らは彼に対して陰謀を企て、その教師にアヒンサカが彼の妻とみだらな行為をしていたと思い込ませる事に成功しました。 そのように彼の心の中に刻み込んだ事から彼はアヒンサカを殺して貰う事に決定しました。

いつも同じようにその日、その師僧は彼の授業料を設定する資格を与えられました。彼はアヒンサカに彼が彼の授業料として１０００本の右指を希望しました。

アヒンサカはショックを受けて、若し彼が彼の指令に従わない場合には、呪われるであろうと警告した彼の師僧に思いとどませようとしました。 そこでアヒンサカはしぶしぶ武器をもって、彼の殺害を開始する為、山林の中に入って行きました。 間もなく、彼はそこら中破壊してしまいました。 彼が殺した人達を追跡して行く為、アヒンサカは彼の犠牲者の指を花輪に結びつけました。 その後、彼は、指の花輪の人間、アングリマラと呼ばれました。

王様は彼の搾取について聞き、彼を捕らえたかった。 アングリマラの母はそれを聞いた時、彼女は、彼女が彼女の息子に警告しなければならないと思い一人で山林に向かって歩いて行く事に決心しました。 一方、アングリマラは辛抱強く彼の最後の犠牲者を待っていました。 彼は、彼が既に９９９本の指を持っており彼の聖職の任務を終了するまで待つ事は出来ない事を知っていました。

釈尊は彼の神性の目でその世界を調査し、アングリマラがその人生の中でアラハッタ（高僧の座）を取得出来る可能性を持っていた事が解りましたが、若し彼が彼の母を殺害したらそれは出来ない事になります。 哀れみから彼はアングリマラを助ける事にしました。 従って、彼は森林に行って、彼は、丁度彼の母親を道の途中で待ち伏せするようにしてアングリマラを途中で捕らえました。 アングリマラは釈尊により心を乱され手にもっていた彼の全ての武器をもって彼を追いかけました。 その釈尊はアングリマラが彼の近くに来ない事を望んでおりましたので彼は出来るだけ早く懸命になって、注意深くゆっくりと歩くように思われた釈尊に追いつかないように彼から遠ざかるようにしました。

終にアングリマラは狼狽して、”止まれ、釈尊、君、止まれ”と叫びました。 釈尊は振り向いて、”私は止まった、君は止まっていない”と言いました。 するとアングリマラは直ぐに止めて釈尊に説明するように要求しました。

釈尊は、”アングリラマ、私は常に停止している。なぜなら私は誰にもどんな害でも与えないように謹んでいるからです”と答えました。　貴方はどうかと言えば、貴方は生き神を貴方自身で害を与える事を抑制しなかった。　だから私は、”私は停止しているけど貴方は停止しなかった”と言いました。

即座にアングリラマは、その釈尊が言った事を理解し彼が持っていた武器を投げ捨てました。　釈尊の足元に身を伏せて、彼を聖職につけるよう懇願しました。　そこで釈尊は、”弟子よ、こちらに来なさい”と言い、即その場でアングリマラは僧侶になりました。
釈尊はアングリラマを彼の僧院に連れて帰りました。

僧侶に入ってから、生活はアングリマラにとって容易ではありませんでした。　彼が彼の施物を持って回して歩いていた時、彼は前の犠牲者の親戚の人達に攻撃され血を流しながら時折、僧院に帰って来ました。　釈尊はアングリマラに向かってアングリマラが背負わなければならなかった悪事に対する責任から来たものであるから我慢するように忠告しました。

施物を持って回っていた或る日、アングリマラは強度な苦痛を伴った婦人に遭遇しました。　可哀想に思った彼はアングリマラの教えを彼にしてくれた釈尊にその事を報告しました。

”お嬢様、私はアリヤンの一族として生まれ、私はどんな生きている人々の生活を意識的に壊した事はありません。　この真理により、あなたの痛みが治り、あなたのお子様もすこやかでありますようお祈りします。”

アングリマラはその教えを学び、その婦人の所に行って真理についての祈祷文作りました。　するとその婦人は、非常に気を落ち着けて直ぐに子供を出産しました。

やがて、アングリマラはアラハッタ（高僧）になりました。

キサゴタミ

キサゴタミはサバテイ村の百万長者の息子の妻でした。　或る日、彼女のたった一人の子供が突然亡くなりました。　彼女は悲しみに打たれ、その子供を腕に抱き釈尊の所に泣きながら走って行き、”師僧様、私の息子を救って下さい。　何か良い薬を上げて彼を治して下さい”とお願いしました。

”はい、お嬢様、私はその方法を知っていますが、あなたも私の手助けをしなければなりません。　サバテイ市に帰って、誰も死んでいない家族から少量のカラシの種子を貰って来なさい。そのカラシの種子が貴方の子供の為の薬です”と釈尊は言いました。

キサゴタミは大喜びでサバテイ市全土を探し歩き回りました。死に物狂いで彼女は家から家を回って、”貴方の家に死亡された方はおりんせんか。若し、いないようでしたら私の子供を生き返らせる為、少量のカラシの種子を戴けませんでしょうか”と頼んで歩きました。　しかし、彼女の行った所ではどこでも、彼女にやさしく、”いいえ奥様、死に神が私達の息子、娘、母親、父親をもって行ってしまいました。

そこで、キサゴサミは、そのような事、つまり、そこには出産があり又そこには死がなければならないと言う事を知りました。　彼女は優しくその子供の死体をお墓の中に寝せて釈尊の所に帰って来ました。　すると釈尊は、”カラシの種子を見つけて来ましたか”と尋ねました。

”師僧様、その必要は亡くなりました。師僧様、私を助けて下さい。　今私に纏わり付いている苦痛を取り去って下さい”と彼女は言いました。　すると釈尊は、どうして、この世界にある全ての愛慕心は私達に何度も生まれ変えらせるのかについて話しました。
それを聞いて、キサゴタミは尼僧の世界の第二位に入りました。そこで彼女は俗生活を捨てて尼僧として聖職を得られる許可を与えて下さるように頼みました。　彼女は非常に勤勉家でした。　或る夜、オイルランプの中の炎の明るい光りをじっと見つめて座っている内に、彼女は全て力と言うものは一時的な性質のものである事を知りました。
そして彼女はアラハッタ（高尼僧）の座を取得しました。

パタチャラ

パタチャラはサバテイの村の百万長者の甘やかされて育った奇麗な娘でした。 見合い結婚の前夜に彼女は彼女の召し使いの内の一人と駆け落ちしました。 彼と一緒に彼女は非常に困難な生活を送り苦しみました。 彼等はやがて子供もつようになりました。

彼女の第２回目の妊娠中、パタチャラはお産の為、彼女の両親の家にしきりに帰りたいと思っていました。 彼女は繰り返し彼女の夫に両親の所に行かせて貰おうとせがみました。 しかし、彼はそれを拒否しました。彼は、婚姻によって出来た親戚のものに酷い目にあわされる事を恐れて姻戚のものに敢えて顔をむけようとしませんでした。 パタチャラは彼がいなくなるまで待って彼女の両親の元へ一人で行きました。 しかし、彼は彼女が陣痛に入ろうとしている途中で彼女に何とか追いつこうとしました。 そこで彼女の夫は彼女を引き留めても無意味であると決断を下しました。 変わりに彼は小さな一区画の土地をその時、丁度吹き荒れ出そうとしていた暴風から彼女が避難し休めるようにする為、せっせと奇麗にしようとしていました。 そのようにしている間に彼は毒蛇にかまれてその場で死亡してしまいました。 パタチャラは彼の死に気ずきませんでした。 彼女は彼が帰ってくるのを待っている間に２番目の息子を出産しました。 彼女が彼を探しに出掛けて朝になって初めて彼の死体を発見しました。

深い悲しみに暮れ、彼女は一人でサバテイ村に帰る事にしました。 彼女は前の晩に嵐で増水し渦巻いていたその川を渡ろうとしました。 しかし、彼女は二人の子供を抱えていては、川を渡るのは難しいと判断しました。 そこで彼女は先ず赤ちゃんと一緒に川を渡る事にし、長男にその堤防の側に座って遊んでいるように言いました。 彼女は川を渡った後、赤ちゃんを堤防の上に置き長男の所に歩いて川を渡って行きました。 彼女が川を半分程渡った丁度その時、彼女は突然或る音を聞きました。 そこで彼女は振り返って見た所、鷹がその赤ちゃんを運んで行く所でした。 早速彼女は手をふりかざしてその鷹を追い払いました。 もう一方の堤防の上にいる長男は彼女が彼を呼んでいるものと思い、彼女の所に向かって川の中に飛び込み溺死してしまいました。

彼女の夫と二人の子供を亡くした事で涙を流し嘆き悲しみながら彼女はサバテイに向かって歩いて行きました。 そこで彼女は見知らぬ人から彼女の両親と彼女の兄弟が昨夜の嵐で家がその嵐の後で家が破壊されて亡くなった事を知らされました。 彼等は既に火葬されていました。 パタチャラは気が狂って泣きながらそして嘆き悲しみながら道路をはいずり回りました。

丁度その時、集会で説教していた釈尊が彼女を見て彼女に彼の方に来させようとしました。　パタチャラが近ずいて来たので彼は、”妹よ、何も怖い事はない。　あなたを守って指導出来る人の所に君は来たのです”と言いました。　早速、パチャラは気を取り戻し、自分が半分裸であった事に気がつきました。　彼女は恥ずかしくなってしゃがみこみました。　或る一人の親切な見知らぬ人が彼女に向かって外衣を投げてやりました。彼女は釈尊の足元に身を伏せて彼女の遭遇した痛ましい話について語りました。　釈尊は彼女を励まし、その死について悲しみ嘆いて見ても意味はない。　”君は実際のその一連の出来事で、あなたは、あなたの息子、夫、両親と兄弟の死で沢山涙を流しました。　既に此の世を去った人達について心配し過ぎないようにしなさい。 心を清めなさい。そうすればニッバーナへの道を見つける事が出来ます。”と釈尊は彼女に言いました。　そう言った後、彼は彼女に説教し、彼女はサタパテイの成果を悟りました。

感謝の意を表し、パタチャラは聖職につけるようにお願いし、尼僧の身分になりました。或る日、水桶の水で足を洗っている最中に彼女は水の流れを見つめて物事は非永久的である事が解りました。　その直後、パタチャラはアラハタ（高尼僧）の座につきました。

SINGAPORE BUDDHIST MEDITATION CENTRE
342-D PASIR PANJANG ROAD,
SINGAPORE 0511
TEL: 7783330 FAX: 7730150